

Eureka XI

六年制通信 No.27 令和5年11月24日(金)号

共通の財産

あれはもう10年前、いやもっと前か、イギリスのBBC放送が空飛ぶペンギンを放映したことがあります。うそお、という映像で、しかし半分信じていたところ放映日が四月一日とわかり、なんや、いつものエイプリルフールかいな、と。しかしよくできていましたね、本当に飛んでいるようにしか見えませんでしたから。最近のフェイク画像の走りみたいなものですが、ペンギンのように微笑ましいものならまだしも、生成AIを駆使した悪意ある画像とフェイクニュースは、はっきり犯罪です。今でも世の中は匿名の悪意に満ちているのに、この上また君たちは、もう一つの大きな悪意の中に生きることになりそうですね。ChatGPTのような生成AIの問題点は、個人情報の流出、偽情報の拡散、著作権の保護、この三つですが偽情報が偽の画像や映像を伴うと、その拡散は大きな社会問題に発展しそうです。ただでさえ日本人は流言飛語に弱いのですから心配です。いわゆる振り込め詐欺でも本人そっくりの声を合成できるようですから、これにフェイク動画をつければ今以上に簡単に騙されるお年寄りが増えそうで怖いのです。この詐欺に対しては「自分の不始末は自分で解決しなさい」といって電話を切るのが一番だと言った人がいますが、これ、今の老人が実際に言えますかね。

さて、フェイクの飛び交う時代だからこそ君たちは本を読むべきです。適当に流し読みをするのではなく熟読をしましょう。そして言葉をたくさん覚え行間を読めるようになり、想像力を鍛え、自分以外の人間の味わってきた物語に触れ、考える行為を通して自分が成長していく感覚を体験しましょう。私たちが生涯で出会う人間の数、言葉を交わす人の数など高々知れています。人間を知るには、本の中に描かれている様々な人に出会うことです。老若男女、古今東西の人々が何を考えてきたか、数多の物語が本の中にあります。そこには君の惹かれる人物が必ずいます。どんな物語に、どんな登場人物に魅力を感じるか、それが君の個性だね。私は君たちの共通の財産ができたらいいと常日頃思っています。せっかく三重中高で六年間を過ごすのですから、卒業してから先輩も後輩も誰もが知っている本がある。いつも言われ続けた言葉がある。建学の精神、校訓、四大綱とは別にね。「学問の大禁忌は作輟なり」でもいいのです。考えてみれば、君たちの年齢で「作輟」なんて読めないでしょ、普通。意味だつて知らないはずですが。しかし君たちは知っている。これはフレーズですが、三重中高では卒業までに皆が読む本があるというのも魅力的ではないかな。先輩も後輩も知っている物語がある。例えば『無人島に生きる十六人』とか。そして自分の子どもにも読ませる…。素敵ではないですか。太宰の本でもいいですね。文章のうまい作家ですから。

それで気に入った本ができれば再読三読していけばいい。私もそうしています。太宰で言えば、『走れメロス』は何度も読みましたな。その度に発見もあり、感動する場面も違っていました。これはシラー（Schiller ドイツの詩人、ベートーベン第9交響曲「歓喜の歌」の作詞者）の詩がこの物語の基盤にあることも知りました。その名も『人質』。読んでいくと、「やんぬる哉」とか「ああ、神々も照覧あれ！」など、いつかのフレーズを太宰はそのまま使っています。物語と関係ないところで面白い発見をしました。

中学生の頃は、ストーリー自体に魅せられるところがあって、それはそれでいいのですが、大人になるとそういう魅力は失せていました。しかし、あの頃全く無視していた、あるいは気づかなかった、物語のある挿話に自分なりの意味を見つけることができました。大人になって読めば、あの二人の友情が最も美しく描かれているのは、最後の場面で頬を叩きあうシーンだと思います。二人が抱擁する直前、私を殴れと言ったメロスに友人は無言で頷き、「刑場に鳴り響くほど」殴っています。そしてまた友人はメロスに同じことをせよと言い、力いっぱい殴られています。お互いの心に生じた小さな裏切りと疑いを殴り合うことで許しあい、抱き合うシーンが読む者の胸に迫ってきます。私は何度も丹念に読みましたが、このシーンには一切無駄な描写がありません。ついでに言うと、シラーの『人質』にはこのくだりだけが見事に欠落しています。私には、太宰の創作したこの挿話がこの物語に命を与えていると思えるのです。こんなことに気づけるのも再読の恩恵ですね。 注：「数多の」は「あまたの」と読みます。

今週のおすすめ

・小川 哲 『君のクイズ』（朝日新聞出版）

クイズ番組を見たことがありますか。好きですか。クイズ研究会のある学校も多いようですね。この本は『Q-1 グランプリ』決勝の最終問題で、一文字も読まれていないクイズになぜ正答できたのかを、この試合に敗れた男が追うお話。「問題です」と言われた瞬間にボタンを押したのですから、しかも正答したのですから、そりゃ不正があったのではないかと疑われても仕方ないですよ。しかし話はそんな単純ではないのでして…。私が面白く思ったのは、クイズに答える際の「先読み」でした。出題者の声の分析も、そこまでやるんだと目からウロコでしたな。例えば、「問題。幸福なか…」で正答できますか、皆さん。一体どんな問題だと推測するのでしょうか。「幸福なか」の「か」から推測するというのですが、考えてみて下さい。ちなみに答えは「アンナ・カレーニナ」です。この答えに至る推論が詳しく書かれていて、私は謎解きよりもこちらの方が面白かったですね。もちろん他にも例題がたくさんあって、どういえばいいのでしょうか、非常に論理的な思考に則ってたった一つの答えに確定される最短の情報を聴いた段階でボタンを押していることが、これまた論理的に書かれています。ま、謎解きは、そんな一文字も読まれていないクイズに正答などできないのですから、何らかのカラクリがあるわけですが、それよりもクイズに答えるとはどういうことか、そっちの方が私には圧倒的に面白かったな。クイズ好きにはたまらない本ですね。

BGMは 西野カナ の アイラブユー でした…。